

長篇推理小説

# イブの時代

多岐川 恭 著



文華新書

## 「文華新書」刊行のことば

新しい宇宙時代に生きる現代人は、今日に強く、さらに明日に逞しく生きるために、どんなまでに文化教養の指針を求めています。

この新書は、激動と混乱の世代に知識を整理し、新しい法則を追求し、美と愛、生と死、結婚と性などについて、尊い価値を創造し、生活を豊かにすることを願ひ刊行するものであります。そして、今日と明日への教養と実益を追求するものと、興趣のつきない読物とを、シリーズとして、文化の華を開かせたいと念願します。

なお「文華新書」の内容、造本など既刊のもの及び今後の刊行について、ご意見などお寄せ下されば幸甚です。

## イブの時代

昭和41年5月20日 第1刷発行

¥ 280

著者との  
諒解により  
検印廃止

© 著者 多岐川 恭

発行者 大島 敬司

印刷所 飯島印刷株式会社

発行所 東京都千代田区丸の内 丸ビル783区 株式会社 日本文華社

TEL 東京・(201) 2752 4750 (211) 5063 振替 東京 43444番

○万一落丁、乱丁の場合は、返送次第本社でお取り替え致します。  
○小社発行品切れの図書雑誌は近くの書店又は本社へご注文下さい。

長篇推理小説

# イブの時代

多岐川 恭 著



イ  
ブ  
の  
時  
代

岐  
川  
  
恭  
著

文華新書・小説選集



日

再使映イ女遍ダ郷

生 命 像 ブ 達 歴 ニ 愁

This image shows a blank sheet of white paper with ten vertical dotted lines spaced evenly across its width. These lines are typically used as guides for handwriting practice, defining columns for letters, words, and margins. The lines extend from near the top margin to near the bottom margin of the page.

八 三 三 六 五 四 七 九 一〇六

新 凶 拷 体 め 浮 機 楽 新

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 生     | 器     | 問     | 質     | チ     | 気     | 械     | 園     | 居     |
| ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... |
| 二二六   | 二二三   | 二〇五   | 一九二   | 一七七   | 一六一   | 一四六   | 一三四   | 一三〇   |

イ  
ブ  
の  
時  
代

## 再生

### 1

暗い洞穴……静かで、寒くもなければ暑くもない、それがどのくらいの時間だったかはわからない。その次に、非常に寒い時期がきた。瀬多時雄は、ごくかすかに、氷河の夢を見ていたようだった。白い氷河の中に埋もれて眠っている自分自身の姿を。氷が解け始めて、まわりが流動する。それが例えようのない冷たさだ。

この時期は短かったようである。次第に温度が上ってきた、と、意識のごく一部でそう感じていた。

最後は、春の中にいた。これまでの、洞穴か箱の中に入っているという、何とはなしの印象は消えて、自由に夢の世界に遊んだ。おどろくほどの鮮やかさで、花や、女体や、衣装や、いつか行ったことのある美しいサロンや、公園のようなものが出現した。

そのあと、完全に意識の絶えた状態があつてから、時雄は覚醒した。



「目が、覚めましたね」と女が男の体中を点検した。

睡眠剤を飲んで、うまく眠れたあとのような、一抹の眠さも残らない目ざめである。

天井が目に映った。それは絹のような感じのやわらかさを持ち、光がみなぎっているようだった。そう言えば、室内には太陽光線は入ってきていない。

時雄はまわりを見た。天井と同じような壁で、窓がなく、足元のほうにドアらしいのが一つあった。その時にやっと気付いたのだが、彼は裸体であった。

「変だな」

と時雄はつぶやいた。ここはどこかということ、どうしてふとんもかけずに、しかも裸体で眠っていたのかということがわからない。いや、頭の中で何か、ひっかかってくるものはあるのだが、妙に遠い感じで、

つかめない。いまの自分の声も、最初は枯れきったように出なかったのだ。

時雄は咳をした。咳はふつうだった。

それにしてもあたたかい。裸体でいて、ちょうどいい温度だろう。

「とにかく……」

時雄はベッドから起き上った。ベッドは鉄製で、これだけが冷たい金属光沢をもっている。スプリングは、これまで寝たことのある、どんなベッドよりも利いていた。

えらくおれは、気分がいい、と時雄は思った。おそらく、体力も最上の状態なのではないか？  
彼は床に足をおろし、立ち上った。大きく伸びをし、体操のようなことをした。ふしぎに、腹はそれほど減っていない。

この時に、ドアが開いた。

異様……としか言い様のない人間が微笑を浮かべながら入ってきた。時雄が思わず前をおさえ、しゃがみこむような不様なかつこうをしたのは、相手が女だったからである。

「目が、覚めましたね？」

女はひどくゆっくり、言いにくそうにそう呼びかけると、時雄の肩に手をかけ、体中を点検するようにした。

「まっすぐに、立って」

時雄が恥じて、小さくなっているのが、女にはふしぎなようだった。

おれはたしか、病院のようなところにいるに違いない、と時雄は自分に言い聞かせた。すると、この女は医者かもしれない。では恥ずかしがる必要はない。

時雄は直立した。女は両手で時雄の肩、腕、胸、腹、下肢、それから性器まで、手でていねいに押しながらあらためた。

「気持、悪くない？」

「ありません」

と答えたが、実は平静な状態を維持するのに、非常な努力が要ったのだ。女の服装も、裸体と言っているようなものだったからである。

身長はむしろ、時雄より高いくらいで、みごとな体をしていた。身につけているのは、薄い紗に似たもので、一種のワンピースだが、スカートは極端に短かい。袖がなく、胸は大きくあけられていた。時雄を参らせたのは、そのワンピースがほとんど透明に近いことで、裸体と同じことであった。その服を着ているのは、単にある程度の保温と、乳房や腹部など、上から締めていたほうが、活動に都合のよい部分をおさえておく必要のためではないかと思われた。

張った乳房と乳首はそのままに見える。胴になって少しちぢまり、淡青色のひだを見せて、また腰部から肢へとひろがっている。下腹部はやはり、淡青色にぼかされ、ひだの多い部分になっていたが、それでもデルタの少し上のあたりまでは見とおせた。下着も、パンティもはいていない。

女はベッドの上に腰をかけ、時雄にも横に坐るように合図をした。

「ぼくはいい、どうしたんですか？」

と時雄は訊いた。何か訊かないと、欲望に圧倒されそうだった。あまり欲望の強いほうではなかった。時雄は戸惑っていた。

「生き返ったのですよ。成……成功でした」

と女は言った。近くで顔を見ると、日本人のようでも、外人のようでもあった。目は澄んだ茶色で、鼻が高く、濃い褐色の髪はゆるく波打っている。唇の色は鮮やかだが、ルージュのあとはない。肌色はいくらか濃目のピンクで、キメは細かく、若々しい艶がある。

「ぼくはなんにも思い出せないんだが……」

「もうすぐ、思い出し……記憶も返ります」

と女の口調はたどたどしい。

「ぼくは一ぺん死んだのですか？」

「いえ、生きていました。二百年」

時雄は、女が冗談を言っているのではないかと思ったが、女は言い聞かせるような語調で、平静である。

「ここはどこなんだ。どこだ」

時雄は突然、恐怖に襲われて叫んだ。

「東京です。東京の……」

女は手をひたいに当てて、ちょっと考えこんだ。

「ラポラトリー……そう、研究所です。人間の」

「じゃあ、病院じゃないのか。ぼくはなぜ裸でいるんです？」

「寒い？」

「いえ、寒くはない」

「目がさめましたから、服をもってきます。いろいろ、お見せしたら、わかるでしょう」

「ねえ……きょうはいいたい、いつなんですか。昭和何年ですか？」

「二千百六十一年です。昭和……というのはありません」

時雄は頭をひどくなぐられたようなショックで、またベッドに坐ってしまった。女はそれを見ると、あわれむように首を振り、彼のしなびた男の部分をつまんだ。

「あなたは健康です。すぐ慣れます」

「二百年って……どうしてぼくは、こんなにピンピンしてるんです。あり得ない話じゃないか。いままで以上に健康だなんて」

「服をもってきます」

女は簡単にそう言うと、ドアを開けて出て行った。

時雄はベッドの上に倒れた。

徐々に、失なわれた記憶の断片が、よみがえりかけていたが、はっきりした像はまだ結ばない。ただ、非常に長い間、自分がどこかに入っていたのだという印象が、次第に強くなった。

さっきの女が入ってきた。

「さあ。着てください。そしてここを出しましょう」

出された服は、やはり奇妙なものだった。

布地は、目の細かいレースのような感じで、袖は肩先から少しばかりついている。裁ち方はいくらか女の服よりも堅い感じだが、もっとゆるやかで、下はスカートになっていた。そして男はパンツをはかねばならなかった。パンツと言っても、ふんどしに似たものである。

着心地は軽く、ほとんど感じがないようだった。縫目がどこにもなかった。

「つまり、男も女も、ワンピースですか？」

と時雄はためらいながら聞いた。

「そうです。いまは春の終りです」

女は答えると、時雄をうながしてドアの外へ出た。

「いまの部屋は、十日くらい、あなたが眠っていたところです」

「十日？ その間……」

「光線であたたかくし、体の働きをよくしました。たくさん注射したり、食物を与えたりしました。それで腹は減らないのです」

部屋から出てすぐの、せまい廊下のようなところは、ホールとの緩衝地帯らしかった。広いホールに出ると、いくらかヒヤリとした。風があつて顔に当るのが、本当に生きた返つたという思いを時雄にもたせた。

ここは、女の言っていたラボラトリーの、ほんの一部なのだろう。それでも、ホールを中心に、多くの部屋があるらしかった。

一方が広い空間で、そこから青空が見えた。見たこともないほど澄んで、高層雲の細部までが、鮮明に見えるようだ。

時雄は空間のほうへ歩いた。すばらしく大きな窓があるのだろうか、昼間はどこかへ巻き上げられてでもいるとみえる。

ベランダに出る。そこに、まるで十九世紀の田園のような風景が展開していた。樹木と花壇が地上をいろどり、方々に気持のいい家があった。芝生の間を、白い道が幾何学的に伸びている。家の形こそやや異様な感じだが、あちこちに様々な形のプールらしいもの、グラウンドのようなものがあり、けっこう、すばらしい眺めと言ふべきだった。

プールで泳いでいる人間があり、グラウンドで、何か不明なスポーツをやっている連中もある。全体が公園のようで、恋人たちが坐ったり歩いたりしているのも見える。

「二百年……世界は潰れなかったのか」

と時雄はつぶやいた。